

2026年8月16日発行

事務所 武石地域総合センター内
TEL:0268-85-2511
<https://www.s-takeshi.jp>
印刷 中澤印刷株式会社



親子で楽しく～ぼうさい教室

～命を守るためにできること～

上田地区更生保護女性会 主催

6月27日(土)、上田地区更生保護女性会(会長 小山澄子さん)が主催する“親子で楽しくぼうさい教室”が武石地域総合センターコミュニティホールで開催され、子どもさん38人を含む69人の参加がありました。

初めに、日本赤十字社長野県支部の水出秀子さんが講師となって、防災減災について親子で学ぶ講座があり、地震が起きた時の室内の家具の配置や人々の行動状況を表した絵をみながら、「この絵の中で危ない所は何处ですか?」、「部屋の中の人たちで間違った行動をしているのは誰ですか?」などとクイズ形式で質問し、子どもたちは一生懸命答えていました。

親子で体験コーナーでは、非常炊き出し袋を使って蒸しパン作りや新聞紙を使ってスリッパを作る簡単工作、親子で相談しながら必要な物に塗り絵をして非常持ち出し袋を作る体験をしました。

また、会場に展示された避難テント、段ボール

ベット、携帯トイレ、防災グッズ、ペットボトルを使ったランタン、などに触ってみたり、実際に使ってみたりして防災用品の体験をしました。

会場では、親子や家族で声を掛け合いながら楽しそうに作業する姿があちらこちらに見えました。

今回のイベント開催に際しては、上田市、教育委員会、武石防災協議会、防災士等連絡協議会、消防団、武石地区赤十字奉仕団、上田市社協、が後援として参加しました。

会長の小山澄子さんは、「多くの皆さまの協力をいただき、今回のイベントを開催することができました。親子の他にもじいちゃんおばあちゃんの参加が多くあり、親子に限らず家族で防災について考える、また家族の絆を育む良い機会になったと思います」と語っています。



5月・6月のお弁当販売



5月／【初夏の山菜わらび弁当】



6月／【山間の筍ご飯弁当】

【お知らせ】 ご好評いただいておりますが、7、8月は猛暑のため、お弁当販売はお休みします。秋に再開する予定です。

毎回、季節の材料と地物の食材を使ったお弁当を心がけています。今回は、こだわりのはぜ掛け米・筍・アスパラガス・新玉ねぎを使用しました。

今後ともできるだけ地物にこだわった食材を使っていきたいと思います。

住みよい武石をつくる会
産業経済部会

「みんなで話そう、美ヶ原高原のこれから」 ～武石から宇宙に一番近い場所～

「あなたは昨年美ヶ原に何回行きましたか?」「いつ誰と何をしに行きましたか?」「あなたと美ヶ原の思い出は?」こんな問い掛けで会は始まりました。約30人の参加者は4グループに分かれ、各自が設問に対する回答を思い思いに付箋に書いて、机の上に広げられた美ヶ原の地図に貼り付けていく作業を行いました。

5月29日(金)、武石地域総合センターコミュニティホールにおいて、各自治会長に地域住民を交えて「美ヶ原のこれから」を考える会が市の主催によりワークショップ形式で開催されました。

ビーナスラインの終点となる美ヶ原高原武石側には高原美術館と道の駅があります。この近くには、かつて民間経営によるレストラン売店とガソリンスタンドがありました。その後、施設は廃業となり老朽化した建物等が残っていました。市は令和8年度事業でこれらの建物を解体し、更地となった市有地の有効活用を検討しています。

この場所は、標高2,000メートルに近く、高



山植物が咲き、展望にも優れ、澄んだ空気を通して満天の星空も観察することができます。夜間は星空撮影を目的としたカメラマンも大勢訪れています。

地域自治センター鈴木地域振興課長から行政の想いとして、「この場所はビーナスラインの終着点であり、車中泊者も多い。滞在できる場所が求められていることから宿泊もできる移動式のトレーラーハウス等、可動産を活用した拠点整備案がある。美ヶ原は地域の共有財産であり、みんなにとっての美ヶ原の価値を守り、育てていきたい」とあいさつがありました。

この場所を有効活用して魅力を高めていくにはどうしていったら良いか、事業を計画する市が住民の皆さまの意見を聞く良い機会となりました。

ススキほうき作り講習会

5月30日(土)、つくる会の産業経済部会と子育て教育文化部会の合同でススキほうき作り講習会が開催されました。今回の講習会は、ススキほうきを武石の産業に繋がられないか、また子どもたちに自然の材料を使ったエコなほうきを作ってほしい、などの思いから、まずは部会員対象に開催したもので、両部会から14人が参加、講師の飯田あさ子さん(産業経済部会)から作り方を教わりました。



材料のススキは今年1月に、上武石の山すそのススキ畑から許可を得て刈り取り、乾燥させたもので、表面の皮剥ぎや穂に付いた種の除去などの下処理をした後、ス

スキの束を糸で編み込み、柄の部分の束を糸で縛って必要な長さに切断などの作業を行い、2時間ほどでススキほうきが完成しました。



ススキほうき講習会

ススキの束を糸で編み込み、柄の部分の束を糸で縛って必要な長さに切断などの作業を行い、2時間ほどでススキほうきが完成しました。

ススキほうきの形や大きさは色々あり、作り方を工夫することで用途に合わせた物ができます。

(ススキほうきは、つなぐ家でも販売しています)

第38回 たけし歴史さんぽ道

堰（農業用水）と開発Ⅲ

郷土史家 見玉卓文

「神社移転願」は移転理由を、「笹焼社信徒四十余戸ハ悉ク旧余里・小沢根二村ノ住民ニシテ、沖区ヨリ壱里余遠隔セルヲ以テ社殿ノ取締及ヒ祭典等不便少カラス、自然崇敬ヲ欠クノ嫌アリ」としており（『上田市公文書館旧村行政文書』）、元亀年中に笹焼社を氏神として祀った氏子は、明治27年には神社のある沖区に一人もいないと記しています。なぜでしょう。

沖堰を取り入れ口へと辿っていくと、清水橋上流の武石川が狭くなるところで石経堰の末端を受け、その先は石積みの痕跡を残して姿を消します。取水口のない沖堰は、石経堰の末端と大堰の幾つかの末流を集めて水量が保たれています。沖堰の開削は武石川からの取水と考えられるので、その切断は武石川の氾濫による崖の崩落と河床の低下と思われます。石経堰がなければ大堰の余り水のみに依存する沖の水田は、耕作が不安定で、しだいに面積が減少し、生活基盤を失った人々はその地を離れたと推察されます。

沖開拓神の笹焼社の氏子が沖にいない原因は、ここにあるのではないのでしょうか。

沖に関わる集落などの退転については伝承が二つあります。一つは、藪合集落が天文4年（1535）の洪水により沖の五日町から移転したとの伝承です（『正念寺観音堂の由来』）。石経堰は開削時期不明ですが、移転後に藪合集落前の末開地（藪合川原と石経）を開発し、末端を切断された沖堰に繋ぎ、沖の復興を図ろうとした堰と考えられます。

もう一つの伝承は、小沢根の子檀嶺神社が五日町から遷ったとの縁起です（『郷社子檀神社嶽石宮由緒』）。慶安四年（1651）の『田方御検地帳』の次の記事は、その所在地を示すものと考えられます。

五日町石原田 是八屋敷分 御年貢なし

一、上田壱反八畝三步 いくつか町明神分

五つか町明神屋敷 称宜左京

此分米武石七斗一升五合

櫻井松夫さんは、五日町で倉稲魂命（うかのみたまのおおかみ）を祀った稲荷社に諏訪上社が勧請されて五日町明神と名のつたが、何時の頃か移されて「17世紀中葉には余里に上諏訪大明神の『本社』が、小沢根にその『前宮』が置かれる形が出来上がっていた」と考えました（『武石村誌254頁』）。

由緒書きに五日町明神の移転の理由は語られて

いませんが、洪水による境内の損壊などが考えられます。

天文4年の洪水の後、人々は懸命の復旧を図ったと考えられますが、次第に共同体の維持が難しくなり、30数年後の元亀年中に、笹焼神を開発一族の氏神として祀り、由緒を記憶して結束を図ったと想像されます。笹焼社は笹焼神のみを祀る社で、笹焼庄司屋敷地内にあったように思われます。

小山の裾を縦に伸びる沖の集落と、
東側から北方に広がる水田



天明元年（1781）開発一族は新たに笹八木大権現社を建立して子孫繁昌などを祈願します。それは新たに笹八木神尊体と大井大和守信廣霊神尊体を建立し、従来からある武石三郎平胤盛霊神尊体を相殿として、小山の現諏訪社地に祀るものだったと考えられます。元禄4年（1691）の『寺社堂御帳』によれば、そこには諏訪明神小宮がありますが、この頃には小沢根の子檀嶺神社に合祀されていたと思われます。現諏訪社は、沖村の再建に当たった郡奉行相馬通孝が新村の産土神として、文政11年（1828）に新たに勧請したものです。

平胤盛霊神尊体は新たに造像されていないので、何処かに祀られていたのでしょうか。おそらく現笹焼社の前に並べられた石造物や後ろの胤盛石神などと一緒に施設にあったと思われます。その場所は、小山の近くにある五輪前という地名があるのでその周辺が考えられます。現笹焼社の石造物も、明治の移転の際に運ばれたのでしょうか。

相殿で祀られた霊神は、堀の内堰を開削して上武石を、大堰を開削して下武石を、沖堰を開削して沖地区を開発したと伝承される人及び祖先のそれぞれの神格化と思われ、武石にとって大切な神々と言えます。

武石の歌と踊りを繋ぐ

～武石音頭・武石小唄・武石讃歌・見よ美しい歌～

“武石音頭・武石小唄”などの伝承活動が住みよい武石をつくる会へ引き継がれることになりました。

第1章

“武石音頭・武石小唄の生まれたルーツ”と “この歌、踊りにこめられた想い”

1 「武石音頭・武石小唄を愛し保存する会」の発足と解散

平成12年頃から国の主導で「市町村合併」と言う、住民にとっては生活に直結した避けては通れない重大な問題がクローズアップされはじめていた頃、我が武石村も例外ではありませんでした。「まさか武石村が合併?!」そんな大きな波のうねりの中にあって「合併の是非に関わらず、永く村民に愛され親しまれ、歌い、踊られて来た武石音頭と武石小唄を後世に残し、引き継いで行きたい」と願う多くの村民皆さまと賛同者の力強い結束のもと、平成15年7月23日に発足、前途揚々たる船出でありました。



しかし、資金、後継者不足の両面から、この先の活動が憂慮される中、ちょうど20年の節目にあたる令和5年3月をもって、断腸の極み、惜しまれつつも解散することとなり、今日に至っています。

2 武石音頭・武石小唄。この歌(踊り)はどのように誕生したのでしょうか



(故)宮下伊佐夫さん

ふたつの歌とも、現在の上小寺尾自治会出身の「宮下伊佐夫さん(故人)」(明治43年3月15日生)が作詞・作曲をし、踊りの振り付けもご本人がされました。宮下さんは、第二次世界大戦中の昭和16年、兵士として中国の奥地・太原に派遣されました。ふるさとを離れた戦友たちが、その辛さ、寂しさを紛らわすためにいつも口ずさみ、自らを勇気づけたのは、自分のふるさとのお国自慢の歌や踊りでした。しかし、ふるさと武石

にはそのような歌、踊りのないことが宮下さんにとってはとても残念でならず、そんな想いを現地で綴った詩が、後にこのふたつの歌が生まれる「原点(ルーツ)」となりました。

歌詞と曲(メロディー)その全てに“美ヶ原”に代表される豊かで雄大な自然に恵まれ、素朴な人柄と人情に厚い村人の姿、“ふるさと武石”を誇り、誉れ高く称え、こみ上げる熱い想いと心情が随所に綴られています。その代名詞が音頭の「♪サッテモ 武石は良いとこさ…」小唄の「♪武石は良いとこ よいやさ…」のワンフレーズです。

踊りの振り付けには、美しく可憐な野山の風景と武石人の気質が惜しみなく表現されています。

音頭は「澄み渡った夜空にくっきり浮かぶ月と清らかな流れの武石川」を…。小唄は「軟らかい手先を天にかざしたひとコマで、村人を優しく包み込むように“立ちのぼる霧”」をイメージしています。



武石小学校運動会(昭和50年代)

3 ふたつの歌を殊に世に広しめた「特別な企画と出来事」

音頭・小唄とも発表当時は「村青年団の女性」が歌唱を担当しておりました。しかし、昭和43年に作者の芸能界への際立つ人脈と、時の村長永井泰美氏の村を挙げての絶大なバックアップが実を結び、なんと当時「日本コロムビアのトップスター(歌手)」であった「都はるみが音頭」を「島倉千代子が小唄」を歌唱した「黄金のレコード」が完成しました。多くの村民がこぞって購入しましたが、今日では、「信州武石村ここにあり!」を印す、世にふたつと存在しない宝物です。



黄金のレコード(個人所蔵品)

* 今回の特集は、元保存会の方から寄稿いただいたものに、つくる会広報部会にて編集を加えて掲載しています。